

一日おくれの無遮大会

持統紀七年（六九三）九月十日条に、

清御原天皇（天武天皇）の爲に、無遮大会を内裏に設く

とある。

天武天皇の崩日は朱鳥元年九月九日なのだから、翌日の九月十日に無遮大会

（国王が施主となり、僧俗貴賤上下の区別なく万人平等に財と法とを布施する法会）を開いたというのは不審である、という。（「日本書紀」下）日本古典文学大系、岩波書店、五

二二頁、注七・八。「万葉集」一（日本古典文学大系、岩波書店、九四頁、注一参照）

ところ、万巻二一六二に、

奉爲の御齋会の夜、夢のうち、習ひ給ふ御歌

一首

(二)

寄萍川「世を」
宇佐から送りやる」
③3360 1/4

5,194^P

万①-95^P

全え
齊会 紀下480³斤
万①-95^P

万①-94⁺
注1

と題する持統天皇の歌がある。
これは、天武天皇崩御から足かけ八年、つ
まり持統七年九月九日の夜にみた夢の歌であ
る。「万葉集」(日本古典文学大系、岩波書
店、九四〇九五頁参照)
明日香の清御原の宮に天の下
知らしめしやすみしわご大君
高照らす日之皇子
思ほしめせか神風の伊勢の國は
沖つ藻も靡きし波に潮氣のみ
香れる國に(米國)の下に脱落がある味こり
あやにともしき高照らす日之皇子
大意明日香の清御原の宮で天の下をお
治めになられたわが大君日之皇子は、
のようにお思いになったからであうか、伊
勢國(も)かいたら宇佐國)という沖の藻さ
えも寄り靡いてその波に潮の香のほのかに立
つようなそんな國に——おいでになつてお
られる。口に言えないほどいとく、慕
わしい日之皇子でいらつーやることよ。
あるいは持統天皇は九月九日の御齋会ま

49.6.8(四)
H6.1.12(水)
→

道路地図
③3360 1/4 (緑) 7P 寄藻川

5,195P

⑤5193 10P

前頁15P

改訂

てには帰ってこられざる筈であつた天武上皇の
ことをその日の夜の夢にみて、歌にされたの
かも知れない。(九月九日)
都合で遅れたのうう。天武上皇は、伊勢
国(又は宇佐国)からの帰途にあつた。
思われる。
そして翌九月十日、天武上皇は帰還され
武天皇の為の無遮大会が、内裏で催された。
であうと推察される。
なお、宇佐八幡宮の近傍を流れる川は、
藻川と呼ばれてゐる。(第22回「寄藻川」参照)
●とはいへ、
「伊邪国(宇佐国)は、常世(大倭国)の
浪の重浪を送りやる国である」と
と考えられていたのであらうとも思われる。
(第六十五章「伊邪国の二ヶ所の内宮」の項
において既述)

5198-72

昭和天皇86
天武天皇

105

5,196

天武上皇が伊勢国（もしくは宇佐国）

へ行かれたことを暗示しているこの歌の中に

日え皇子（あまの皇子）および日え御子（あまの御子）

とあつて注目される。

一方、魏志倭人伝中の倭の女王曰卑彌呼（あまの御子）

について、新井白石は、

日御子（あまの御子）

と解し、天皇のことであらう、という。（「岩

波文庫」四三七〇、岩波書店、四八頁参照）

なお、この物語では、

昭和四十三年八月二十日第二回刷発行「魏志倭人伝」

卑彌呼と神功皇后と天照大神は、同一人

物（もの）であらう

と述べた。（荒筋参照）

とすれば、

日御子（あまの御子）卑彌呼（あまの御子）神功皇后（あまの御子）天照大神（あまの御子）

に

あるいは、先の歌は、

明日香（あすか）の清御原（きよみはら）の宮（みや）で天（あめ）の下（した）をお治（おさ）めた

なられた日（ひ）え皇子（みこ）（天武上皇）は、伊勢

国の日御子（ひの御子）（天照大神）のもとへおいで

もしくは宇佐国

5,197^P

19回
525-522

こと

改行

な っ て お う 水 る 。 お 二 人 と も 一 と 一 へ
幕 巾 一 い 高 照 う す 日 え 御 子 乃 で い う っ し や
る こと よ
と い っ た 意 味 な の か も 知 れ な い 。 持 統 天 皇 は
十一月五日 吉 野 宮 へ お で ま し にな っ た
(第十九回目) 。 十日 に 車 駕 は 宮 へ お 還 り に
な っ た 。

米

藤原大島 10(新)に及 同又河内王 469 万①-200 注1
 ⑤189 ⑦1712-1/3-2/2 紀下499 5,198 P-1/2 購物 紀下511 注31 紀下524 55 紀下524 4行 万①-201 次頁18行
 20回 紀下524 55

持統八年

石戸破る手力もかも

持統八年(六九四)一月二十一日

藤原

宮へおでまーになり、その日のうちに宮へお

もとりになつた。

一月二十四日 吉野宮へおでまーになつ

た(第二十回目) 万 12.5 44 1つ宮へお戻りになつ

たのかは分らない 浄大肆を筑紫大宰率 万 520 42

四月五日 内王山にお贈りになり、あゆせて贈物(喪主

におくつて助けとするもの)を賜わつた。

なお、万巻三一四一七と四一九に歌われて

いる 万 520 42 河内王山について、

この当時、河内王は何人もいるか、持統

三年閏八月二十七日に筑紫大宰帥となつた

河内王山のことであらう。また、持統紀ハ

年四月五日条に、筑紫大宰率河内王に浄大肆

を贈り、贈物を賜わつたことが見えるから

その少い前に現職で現地に没したらしい

という。(「萬葉集」(一)日本古典文学大系、

岩波書店、二〇〇頁、注一参照

さて、万葉集四卷第三には

河内王を豊前國鏡山に葬る時、手持

女王の作る歌三首

と題する次の三つの歌がある

(47) 親魂逢へや豊国の

鏡山を宮と定むる

(大意) 河内王のなれ睦人だ魂と再び逢え

鏡山を永入の宮と定めることよ。

姿を見るという名の豊国の

鏡山を永入の宮と定めることよ。

(48) 豊國の鏡山の石戸立て

隠りにけらし待てど来まさず

(大意) 豊國の鏡山のお墓の入口に岩の戸

を立てて、お隠れもりになつたらいい。いくら

お待ちしても、出ておいでにならな

い。

(49) 石戸破る手力もかも手弱き

女にあらは術の知らなく

(大意) お墓の岩の戸を破る手の力が欲

い。手の力の弱い女である私にはどうしたら
よいのか。術が分かりません。

木もかもしは「……かあるといいなあ」の意である（広辞苑）

■先に述べたように

△岩戸の儀式によって、幾度も生まれ代わ

れる出来左時代が、かつてあった

という我が国往古の風習をこの歌は示しているように思

われる。（第二十五章へ壽考へながりき）

の項において既述

■また参考次に述べると、豊前国風土記逸

文、鏡山系には、田河郡に鏡山があったと記

されてあり、今の福岡県田川郡香春町鏡山

鏡山神社のある岡が遺跡地という。（「風

土記」日本古典文学大系、岩波書店、五一

頁、注一四参照）

・また

「福岡県田川郡香春町鏡山」という所はある

か、鏡山と呼ばれてゐる山は無い。鏡山

という名は、古墳に青銅鏡を収めるところか

ら、広く各地で、古墳に名づけられている

22回 持5198 4277
紀下526 1/2
H11.12/15 OK

紀下525 1/2 上のえぬのひ
「5月6日戊子」とある
5,200 1/2 紀下5 上段末

21回 持5198 1/2
紀下524 持88

万①-167 天つき
改行

次々
遷宮
小林
308
慣
グフ

ともいう。「萬葉集」(一)日本古典文学大系、
岩波書店、一六七頁、万巻三一三一一の解説
参照)
四月七日(庚申)に、吉野宮へ幸いづまされた
(第二十一回目) 丁亥に、天皇は吉野宮か
らおかえりになった。
なお、天皇が吉野宮からおかえりになった
日を、底本は丁未、北野本・閣本は丁亥とする
が、いずれも四月には無い。
そこで、書紀集解(河村秀根)は、丁卯十
四日とする。(「日本書紀」(下)日本古典文学
大系、岩波書店、五二五頁、注三三参照)
しかし、もしかいたら、
へ持統天皇は、四月七日(庚申)に吉野宮
へ幸され、それから約一ヶ月間を吉野宮
でお過ごしになり、五月五日(丁亥)もしくは
五月二十五日(丁未)におかえりになった
というところなのかも知れない。
九月四日 吉野宮へおでまーになった(第
二十二回目) 還宮の記事は無い。

F4/25
4/25

考えられる。

して、三野王（橘諸兄の父）が任命された。

四月五日条の筑紫大宰率河内王の後任者と

率に任じた。

九月二十二日に、浄広肆三野王を筑紫大宰

照

典文学大系、岩波書店、五二五頁、注三三参

の行幸のみである。（『日本書紀』下）日本古

回月）と同八年九月条（二十二回月）の二回

五回の御幸のほか、持統紀八年正月条（二十

年条）四年条にかけての二回目と六回目迄の

このように還宮の日を記さないのは、持統紀三

308

論 おてりな 909^p
 小林 959^p
 高市 紀下484^p
 高市 紀下484^p

5, 201^p - 1/4
 紀下516^p 紀下506^p 602^p 注10
 ⑤518^p ⑤5180^p ⑤5784^p

紀下526^p 134^p
 4227^p ⑤B

藤原宮への遷都

持統紀八年（六九四）十二月六日条に、

藤原宮に遷り居します

とある。（写真図版 785・786 参照）

つまり、去る持統四年十月二十九日に高市皇子

が藤原の宮地を視察されてから四年後、持

統六年五月二十三日の藤原の宮地の鎮祭（い

わゆる地鎮祭）からわずか二年半後に遷宮さ

されたことになる。

なお、持統天皇の国風論号は、高天

原広野姫天皇である。（紀）

へ天上の国（肥後国）のタクマが原も、奈

良盆地南部の地も、共に高天原である

と人々は認識していたようである。（既述）

だから、

藤原宮で天の下を治められた持統天皇に

高天原広野姫天皇と諡したので

あろう

と思われ。

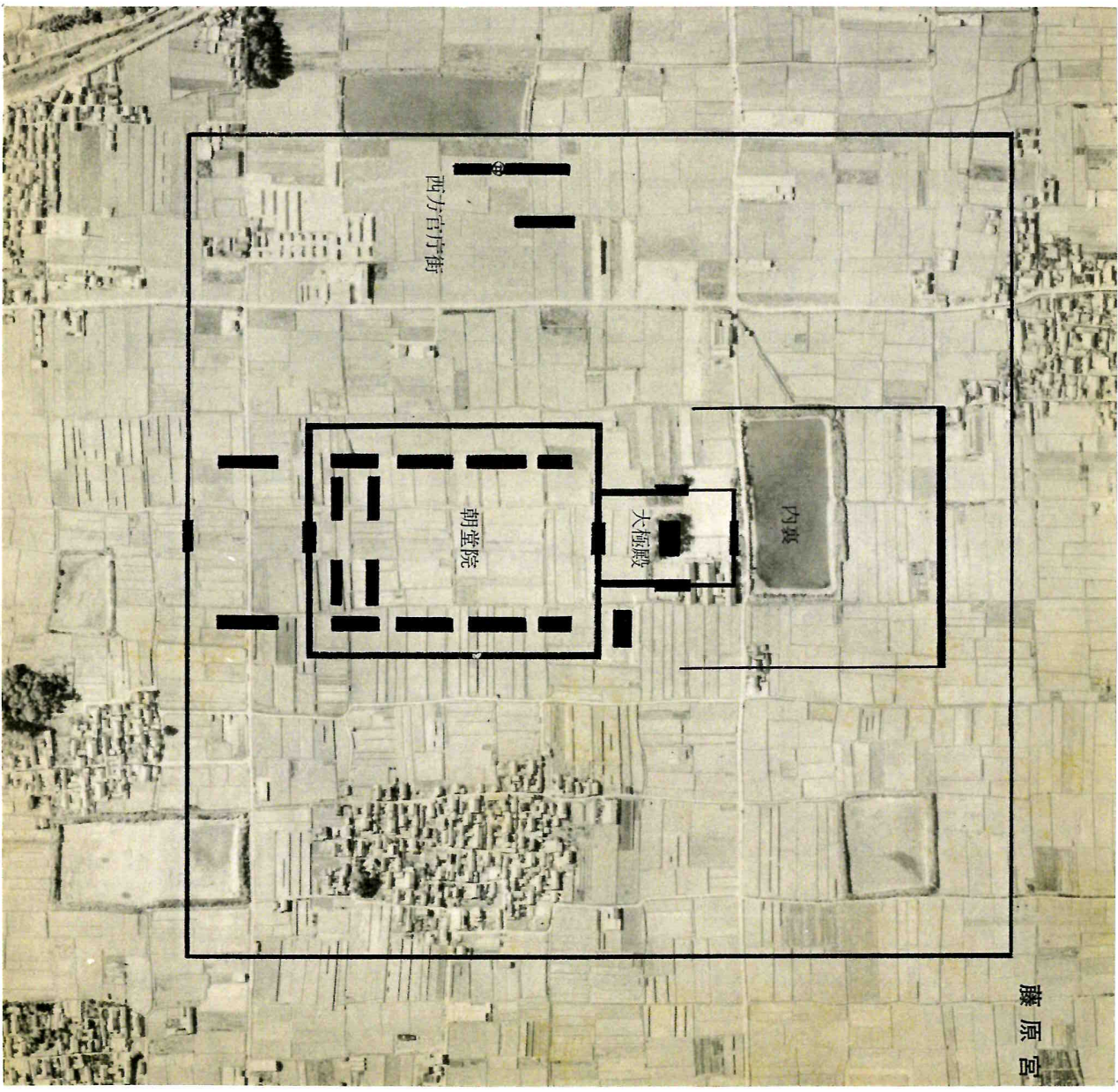
⑤5207^p 1/2 525^p 高市皇子 遷宮（カミミヤ）

カー

- ・右頁上半分、大きくはみ出して掲載下さい。
- ・上・下は、適宜カットして下さい。
- ・明るくお願いします。

＊上下を同じ高さでカット下さい。

5,201^p-2/4



526. 16

1304

1404

写真図版 785

藤原宮

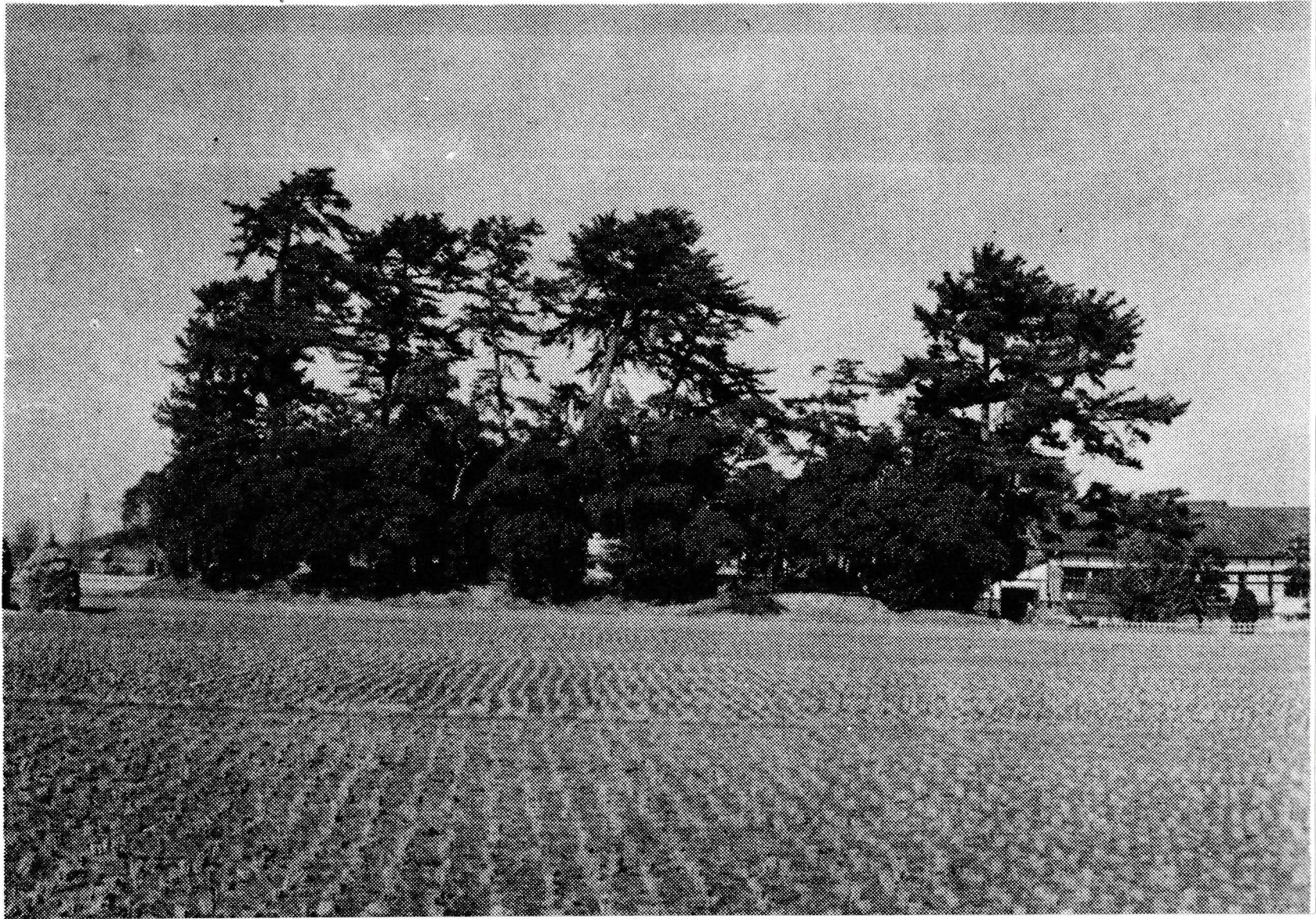
『飛鳥』朝日新聞社、昭和47年10月～48年4月開催「飛鳥展」用の図録、49頁参照

5,201² 3/4

・左頁上半分
大きくはみ出し
掲載下さい。

・背景の空も
明るく、
お願いします。

上下
・左右は、適宜
カット下さい。



← 2本の横線より。空のヨコ線をトル

13GG

14GG 写真図版 786 藤原宮の大杉殿

『飛鳥』朝日新聞社、昭和47年10月～48年4月開催「飛鳥展」用の図録、48頁参照、
(第12巻) 527-1/2

令和6(2024)9.5木 朝刊 27面

「九九」暗記 飛鳥時代の役人も？ 藤原京跡の木簡に一覧表

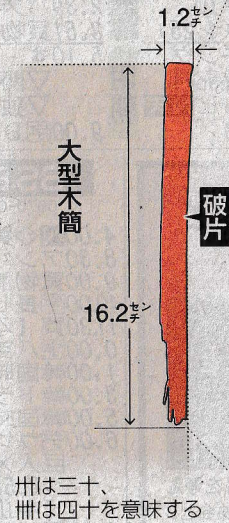
藤原京跡（奈良県橿原市）で出土した7世紀末～8世紀初めの木簡が、かけ算の「九九」の一覧表だったと判明した。奈良文化財研究所が4日発表した。役所で使われたとみられ、実用的な九九木簡としては最古級という。飛鳥時代の役人も、九九を覚えるのには苦労した？

木簡は2001年、藤原京の宮城の番兵が属する役所「衛門府」の推定地で出土。長さ16・2センチ、幅1・2センチで、大型の木簡の一部とみられる。

当初読めたのは九九の一部で、規則性が見いだせないため、文字の練習用の木簡とされていた。しかし昨年、赤外線装置で再判読した結果、縦に「九々八十一」「四九卅（三十）六」「六八卅（四十）八」と書かれている可能性が高いと判明。九九を右から左へ5行ずつ段組みにして並べた一覧表で、その右上端にあたると推測できるという。これまで日本で見つかった一覧表は2～3行のものばかりだが、5行は秦漢時代（紀元前3～紀元後3世紀）の中国の規範的なスタイルという。日本で九九が文字として確認できるのは7世紀後半以降だが、古墳時代に伝わり、古墳の設計などに使われた可能性がある。読み書きと共に、古代の役人の基礎教養だった。桑田訓也主任研究員は「九九がすべて書かれたとすれば、木簡は長さ33センチほどになる。持ち歩くには大きく、役所に置いて使ったのでは」と話す。研究成果は「奈良文化財研究所紀要2024」に掲載される。（今井邦彦）

九々八十一 四九卅六 六八卅八

かけ算の「九九」の一覧表を記したとみられる大型木簡



令和6(2024)9.8

天声人語

ひらがなカタカナの成立前に生まれた万葉集は、すべて漢字で記されている。いわゆる万葉仮名だ。中には、なぞなぞのような表記もあっておもしろい。

ある一首は、人知れぬ恋が顔色に「山上復有山」ば、と書かれている。山の上にまた山で「出」。出では、と読む。▼こちらはどうかろう。あの人と一夜とて別には過ごせない、「二八十一」なののに——という相聞歌だ。答えは「憎く」。八十一をククと読ませるのは、かけ算の九九によるそう。だ。「二二」と読むのもあって、あの暗記法はどうも古くからあるらしい▼奈良県の藤原京跡で見つかった木簡は、九九の一覧表の一部だった。新たに判明したと先日の記事にあった。大きさからすると、古代の役所に置かれていたという▼九九は中国から伝わり、当時の役人にとってはすでに基礎的な教養だったそう。確かに、税の計算をするにも物の管理をするにも、四則演算は必須であつたらう▼でも覚えが悪いのはいたはずで、人知れず「ニニンガシ」「ニサンガロク」とそつと繰り返していたに違いない。我が身をふりかえれば、運良く九九はすり抜けたが、高校での三角関数には泣かされた。サインコサインタンジェント。呪文のような公式は、何度聞いてもこんがらがった▼万葉集ならば「二二苦八苦」と書くところだろうか。四苦八苦。数字や記号を丸のみする大変さは、いつの時代も変わるまい。古代の役人に会えたら「よう、ご同輩」と、励ましあえる気がする。

2024・9・8

25回
紀下528

24回
紀下527

23回
紀下529

5,201^P-4/4

また、先述のよう

へかつて、大倭国（肥後国）のタクマガ原

の宮から、白川北岸の新宮へ遷都したよ

うに、大和国の高天原の藤原宮から

泊瀬川北岸の新城（平城宮）へ遷都すること

が、藤原宮への遷都当初からすでに構想のう

ちにあったのであろう

と推察される。

*

持統九年

持統九年（六九五）閏二月八日に、吉野宮

へ幸された（第二十三回目）。十五日に車駕

は宮へお還りになった。

三月十二日に、吉野宮へ幸された（第二十

四回目）。十五日に天皇は吉野からお歸りに

なった。

六月十八日に、吉野宮へ幸された（第二十

紀+530°

④4416°
④5191°

④5192°

28回
④529°
5,202°

P

草壁皇子薨去
④5175° 29°

27回
紀+528°

26回
紀+528°

五回目) 二十六日に吉野からお歸りになった。
八月二十四日に、吉野へ幸された(第二十
六回目)。三十日に吉野からお歸りになっ
た。
十二月五日に、吉野宮へ幸された(第二十
七回目)。十三日に吉野からお歸りになった。
持統十年(六九六)二月三日、吉野宮へ
幸された(第二十八回目)。十三日に吉野か
らお歸りになった。
三月三日、多武峯の二槻宮(両槻宮とも
あまつみや)と
天宮ともいう)へ幸された。
四月二十七日に、肥後国の皮石郡(和名抄
に合志郡(加波志)とある)のひと生生諸石
らに追大式をお授けになった。
すなわち、日本書紀の末尾近くになって、

たけちのみこ
高市皇子の薨去

持統十年

あか証 14

30回 5203 P

29回 5203 P

30回 5203 P

初めて、^{（はい）}皮石郡^{（かはしのこほり）}という地名が記載されて
いる。

• はたして本当に、その昔、^{（むかし）}皮石郡^{（かはしのこほり）}の地
に都が置かれた^{（みやこ）}とが^{（あ）}あったのかどうか、

それは現時点では全く分からない。

しかし、これまで述べてきたように、^{（のこほり）}皮石郡^{（かはしのこほり）}と^{（あ）}平城^{（へいけい）}との間に、深いつながりがあるのではなからうか、と興味深く思われる。

次^{（つぎ）}の日、四月二十八日に、吉野宮へ幸され
た（第二十九回目）。五月四日に吉野からお帰り

になった。

• 六月十八日に、吉野宮へ幸された（第三十回目）
二十六日に吉野からお帰りになった。

■ 七月十日に、後皇子尊（高市皇子）が薨じ
られた。

• なお、この記事において高市皇子に^{（みこと）}尊^{（みこと）}と
という尊称も加えたのは、草壁皇子に^{（みこと）}ついで
立太子したことの証である、と伴信友はいう。

• だが、その確証はないという。（日本書紀）

（下）日本古典文学大系、岩波書店、五三〇頁、
注二一。同、五九一頁、補注二九一（高市皇子命）参照）

懐八葉81⁷ 與多^{4637P} 5,204^P ⑤5202⁹ 紀下495^P ⑤5175⁵⁹ 懐八葉82⁶

謀立^{はかたつ}日^ひ冊^ふ。衆議紛^{しゅうぎふん}紜^{えん}。

七年^{しちねん}前の持統三年^{もちとうさんねん}（八八九）四月十三日に
 皇太子草壁皇子^{すくもかべのみこ}尊^{うやまつ}が薨去^{こうきょ}されたばかりか

持統十年^{もちとうじゅうねん}（八九六）七月十日には、後皇子尊^{のちのみこのみこ}
 （高市皇子^{たかちのみこ}）までもお亡くなりになってしま

ったのである。
 いったい、誰^{だれ}を皇太子^{みかど}にしたらよいのだ

うるか
 恐らく、この当時の様子^{ようす}を描写^{びやうしや}しているの
 であろう。懐風藻^{かいふうそう}の葛野王^{かしのみ}伝^{でん}は、次のよう

に記^きされている。

王子^{みこ}（葛野王^{かしのみ}）は、天智天皇^{てんちてんこう}の孫^{まご}。大友太子^{おほともみこ}
 の長子^{ちやうし}であり、母^{はは}は天武天皇^{てんむてんこう}の長女^{ちやうむすめ}十市内親^{とちのちか}

王^みである。（中略）

高市皇子^{たかちのみこ}が薨^{こう}じて後に、持統天皇^{もちとうてんこう}は皇族^{こうしゆ}
 諸侯^{しよこう}百官^{ひやくくわん}を宮中^{きやうちゆう}に召^めし、日嗣^{ひつぎ}（皇太子^{みかど}）を

立てようとお謀^{はか}りになつた。時に群臣^{ぐんしん}はそれ
 ぞれ私情^{ししやう}を心に抱^{いだ}いて、衆議^{しゆぎ}が紛^ふ紜^{えん}した。そ

の時、王子^{みこ}（葛野王^{かしのみ}）が進^{すす}み出て言^いつた。
 我^{われ}が国^{くに}では、神代^{かみよ}より以来^{いらい}、子孫^{しそん}が次々^{つぎつぎ}

5.205P
1801

5.205P

相承けて天位を襲いできた。その小なのに若
も一般のようになり、そして我輩の一時期の
ように兄弟が相及ぼして相統するならば、
紛乱はここから起るであらう。天心は推測で
きなない。一般論かでもしかしたらや父大友天
皇、そして己めを念めて言っているので
あろうか。にしても、人事（人間関係）
から推しはかれず、天子のよつぎは自然にき
まっている。とやかくよけいなことを言うべ
きではない。

これに対して、弓削皇子（天武天皇の子）
が何かひとこと言おうとしたか、王子（葛野
王）は一喝して叱りつけた。こうして結着が
ついた。

持統天皇は、其の一言で国（国家の日嗣）
を定めたことをほめ、
式部卿（式部省の長官）に任ぜられた。
時に年三十七

とある。

ともあれ私情を心に抱いて紛糾していた

天意

群臣達の議論が、――葛野王の一言によっ
て定まった。皇太子

紀一である軽皇子（後の文武天皇）を皇太子

とすることが、決定されたように推察される。

何故衆議紛紜したのか、そして

又、ろ削皇子が何を言おうとしたのかは分から

ない。

な、子孫相承けて天位を襲ぐ」という

思想が採択されるべき、吉野の会盟での確約

のとおりに、やかて天智天皇の血筋を引く者

に皇位は巡って来るべきになる。

天智天皇の直系の子孫（大友天皇の長子）

である葛野王は、心の内に、少なからぬ期待

があつて、

へ血筋の流水通りに、天位を継ぐべきだ

と主張したのかもしれない。

しかし皇位は吉野の会盟に加わつていた

荒基皇子の第六王子、光仁天皇へと引き渡

されることになる。（既述）

＊

紀下532² 輕皇子

輕皇子の立太子

持統十一年

草壁皇子の第二皇子(統紀)である

翌年の持統十一年(八九七)二月十六日に

輕皇子が皇太子の位に即かされたようである。

①輕皇子の立太子については、日本書紀に見え

ず、持統十一年二月二十八日条の記

事(後述)から、その日(二月二十八日)以

前であることが推定される。

②統紀、文武即位前紀に、

高天原広野姫天皇(持統天皇)十一年、

立為皇太子

とある。

③統紀の引く私記には、

王子技別記曰、文武天皇少名珂瑠皇子。

天武天皇皇太子草壁皇子尊也。持統天皇

十一年春二月丁卯朔壬午(十六日也)、立為

皇太子

とある。

なお、懷風藻などによると、文武天皇(輕

武天皇即位前紀

紀下534 卷2

こと 5210 13 15才 即位

皇子の没年は二十五歳であるから、この時は十五歳であつたことになる。(「日本書紀」(下)日本古典文学大系、岩波書店、五三四頁、注二参照)

そして十二日後の持統紀十一年二月二十八日条に、

「直広売当麻真人国見を東宮大傳(皇太子

の輔導にあたる官職)とした。直広参路真人跡見を春宮大夫とし、直大肆巨勢朝臣栗持を亮(次官)とした」とある。

*

5193
5226

宇106F329

平成元5/5
31回
5252

5,208

天武前 紀下480
天武 元武元年(686).9月9日
紀下530 天平前 持統10年 7月10日(庚戌)

無運大会 紀下487 庄27

てい
と
の
ろ
う
で
こ
れ
ま
で
述
べ
て
き
た
と
お
り
、
御
様
子
、
心
を
痛
め
て
お
ら
れ
る
、
病
に
み
た
て
平
癒
を
祈
つ
て
、
公
卿
・
白
寮
が
天
皇
の
病
気
持
続
天
皇
が
、
退
位
し
よ
う
か
と
い
う
よ
う
か
と
、
吉
野
宮
へ
幸
せ
な
れ
た
、
三
月
八
日
条
に
、
無
遮
大
會
を
、
春
宮
に
設
く
し
と
あ
る
。

持
統
天
皇
、
輕
皇
子
、
文
武
天
皇
に
讓
位
す
。

紀下476朱豆25
⑦5151P

改行

紀下378^{3行}5,209P

持統女帝 日本史(2) 読了86³

ニ

天皇の一途な病^{ヤマイ}が昂^{あがり}じて、ついに譲^{ゆづ}位^いされることを^ニ天皇の^ニ逝^{せい}去^{きよ}とみなすことが、こゝまでの常^{つね}であつた。よ^うた^た推^い察^さされるのであるが、しかし、持^も統^{とう}天皇の場合だけは違^{ちが}つた。

●日本書紀の編纂者達は、持統女帝の場合に限り、は^ニ讓^{じやう}位^いの事実を隠^{かく}す必要がないと判断したものである。

七月二十九日に、公卿・百寮は、公の開眼^{くわんげん}の法会を薬師寺で催した。

●参考迄に述べると、^{紀下378^{3行}5,209P}

①天智十年八月へ又は九月へに天智天皇は病^{ヤマイ}氣^きになられ、十月八日に内裏で百^{もも}仟^{せん}の開眼会^{くわんげんかい}を行^{おこな}われ、十二月三日にお崩^{おこ}れになつた。

●天智天皇は大友皇子に讓^{じやう}位^いされたのであろう。(既述)

②天武天皇の朱鳥元年五月二十四日に天武天皇は始めて熱^{あつ}にうかされたように病^{ヤマイ}篤^{あつ}くなられ、八月二日に百^{もも}の菩薩^{ぼさつ}を宮中に坐^ませ、九月

昇^{あがり}は俗^{しやく}言^{ごん}

697年即位 15才
 685-702
 697即位 53才 5208 257
 645年 1
 52 52

5,210⁺

697年即位 15才
 685-702
 697即位 53才 5208 257
 645年 1
 52 52

改行

九日に崩御された。
 天武天皇は退位
 され、天下のことも皇后におまかせになった
 のであらう。(既述)
 天智・天武・持統各天皇共
 似たような
 経過の後に天皇位を返上されたように読みと
 れる。
 八月一日条に、
 天皇策を禁中に定めて、皇太子に禪天
 皇位りたまふ
 とある。(記)
 ・持統天皇は、皇太子軽皇子(文武天皇)に
 天皇の位をお譲りになった。
 時に、持統天皇五十三歳。軽皇子十五歳で
 あった。
 *
 なお、天武上皇は、二朝時代の現出を恐
 れ、皇后(持統天皇)に天下のこともおま
 かせになったのであらう、と先に述べた。
 持統天皇は、夫君の期待に恥えて、よく天

H29(2017)9.23~9.28,

H30(2018)11.23(金)~11.23(4回)

令和元(2019)10.2(土)~11.4(4回)
令和2(2020)6.25(木)~6.28(4回)

5,211^P

こと

4/28 F 6/27
6/26

皇とての務めを果された。
しかし、女帝持統天皇は限界を感じ、
退位を決意され、皇太子軽皇子に天皇位を
譲りたいと思われたのか、知らない。
こうして、天武上皇が存命中であるにもかかわらず
ずいずいの軽皇子が天皇位を継ぐこととなった
ように思われる。

*

巻文
5173
1937